

論文

話し言葉にある中国語の慣用色名の研究

A Research on Common Color Names in Verbal Chinese

呂 清夫 Lü, Ching-Fu National Taiwan Normal University

Abstract

In a great volume of the common color name which was formed in the past 3000 years of Chinese history, how can we select or “dig up” a very practical color name set for common use? Must it be selected by authority? or we can have other choice? Base on the latter thinking, this research have made a through investigation by interview people as many as possible to gathering color name as our sample. Statistics was made for each color name by the employment of the above mentioned data. So, one can see color name including in these set are more important than any others in common use due to it high frequency. From this research one also easily knows the general character and trend of these color name when they are classified according to different color spaces.

要 旨

漢字の海と中国語にある色名は、約三千年の累積の下に、既に膨大なボリュームができたはずであるが、その中にどのように「発掘」して、また精選して、最も実用的な色名セットを整理しきれぬのか、専門家による決定のほか、なにか他の方法がないのか、という発想のもとに、調査やアンケートの方式について試してみた。つまり、できるだけ大量の標本をサンプリングした結果から、各種の色名を集めるとともに、その色名の使用頻度を確認する、そしてこの頻度に基づいて、色名が、ほかの色名セットに比べて多く精選され得る。と同時に、収集した色名を色系に分類すると、中国語の色名の性格をも明らかにすることができる。

1. 緒 言

盛田と香川の調査¹⁾によると、若年層男子の慣用色名の認識では、日本工業規格（JIS）の105語の慣用色名に対して、認識されていない色名は28.6%、認識があいまいな色名は18.1%であった。そして、色名の代表色がJIS値より異なるのは、15.2%で、そのうち70%近く高彩度化していて、この高彩度化傾向は性別差、世代別差に関係なく見られた。この論文を見る以前に、筆者は既に常用している色名について懸念していた。つまり、慣用であるとともに常用である色名が存在しないのだろうか、という懸念が常にあった。そして、こんな色名が標準色名に選ばれれば更にいいのではないだろうかと思った。しかし、色名は人びとの生活習慣や、趣味嗜好の反映であるから、徹底的なリサーチがないと、標準色名の制定は到底難しいであろう。Maerz-Paulがその著名な「色彩辞典」の中に、3,467語の慣用色名を収集したが、その中から、また使用頻度の高い色名を選び出した。つまりアメリカ英語の色名が102個、イギリス英語の色名が104個であった。その選び方として、まず両国各地のペンキ工場から、それらが発行した色名つきの色カードを収集し、それを統計して、色名の使用頻度100%から12%までのものを選んで決めた²⁾。これはなかなかいい方式であるを知ったが、残念ながら、ほかの業者の色カードや、特に重要な文献にある色名を参考にしていながら、集計には入れなかった。言ってみれば、その大部分の色名の起源は、おもに色カードと文献からであったが、即ち、その処理する対象は、書き言葉であって、話し言葉ではない。

ところが、話し言葉がもっとも日常性のある、使用頻度の高い色名の起源の一つではないだろうか、つまり、慣用色名や常用色名を収集するには、文語と口語両方とも注目すべきであろう。福田³⁾が言ったとおり、文献にある色名の調査は、まさに古墳を発掘するようなものであり、そして、筆者に言わせれば、言葉にある色名の調査は、民謡の採集のようなものではなからうか、要するに、色名も一種の文化財であろう。

2. 調査方法

こういう懸念のもとに、筆者が1984年から4年間、行政院の国家科学委員会の援助のもとに、書き言葉と話し言葉にある色名を調査してきた。そして、「色名の初歩調査と研究⁴⁾」という印刷物を出版した。書き言葉の調査はおもに、古来の著名な文献に対するリサ

ーチであるが、ここではまずその話し言葉に対する調査について論じ、文献のリサーチの分析を後にすることにした。今回の調査方法として、基本的に心理言語学、神経生物学の学者E. H. Lennebergの方式に従って、中国語を母語とする人たちに、彼らに常用的なものとして「思い出すかぎりの全ての色名」(all the color words they [could] remember⁵⁾)を書き出してもらうか、あるいは話してもらって、インタビューする人が記録する。そして、各人互いに書いた色名が重なればかきさなるほど、その色名が最も重要になると考えられる。

サンプリングとして、台湾全島（澎湖群島などをも含める）の中にある361個の「区」（東京にある区に相当する）ごとに、5人ずつサンプリングする。その5人の中には、必ず教育程度が小学校程度1人、中学校程度1人、高校程度1人、大学程度2人を含めている。調査には、性別、年齢、本籍、話せる言葉、職業、専攻（大学程度だけ）などの要素をいちいち記録する。サンプリングには、ランダムサンプリングをとらない。というのは、サンプリングされた人が質問を拒否する場合がよくあるからである。まして、この調査では、とても時間がかかるので、一部の質問票を完成するのに、約40分間がかかる。そこで、改めて系統サンプリングと判断サンプリング（judgement sampling）のミックスした方式を採用した。

一つの「区」ずつ5人を系統的に抽出するのは、系統サンプリングに基づいているものである。それが

表1 全サンプル基本資料表

		実数	パーセント			実数	パーセント
性別	男	862人	47%	話 せ る 言 葉	北京語	1758人	97%
	女	953	53		福建語	1582	87
教育 程 度	小学校	360	20		客家語	277	15
	中学校	363	20		廣東語	34	2
	高 校	366	20		英 語	391	22
	燎文科	125	7		日本語	129	7
	理科	70	4		高砂語	96	5
	法科	27	1		その他	22	1
	商科	98	5	職 業	總計	321	18
	工科	168	9		農 民	46	3
	農科	26	1		職 工	143	8
	医科	28	2		漁 民	6	0.3
	師範	125	7		商 人	106	6
	藝術	34	2		軍 人	27	1
	其他	25	1		自由業	79	4
本 籍	北 部	555	30		学 生	852	47
	中 部	540	30		主 婦	125	7
	南 部	575	32		その他	110	6
	東 部	145	8				

ら判断して、教育程度が色名に対して、最も影響のある要素だから、教育程度別でサンプルを抽出する。中でも特に大学程度だけ2人を抽出するのは、今回はできるだけ多数の色名を収集するためであり、そして大学程度の人々が色名に対する認識が深いであろう。これらは判断サンプリングに基づいているものであるが、実際にも、このことが調査の結果によって立証された。つまり、教育程度が高いほど、書いてもらった色名も多かった。今回調査の対象が全部で1,815人、内訳は、男性が862人、女性が953人であり、その他のサンプルについての基本資料は表1に示したとおりである。

3. 調査の結果

3.1. 基本要素の色名収集に対する影響

結果はコンピュータの計算によるが、1,815人から集めた色名数が73,229個であり、平均して、一人が書ける色名が40個である。そして男性から集めた色名は32,151個、平均して一人は37個の色名を書きだす。女性から集めた色名は41,078個、平均して一人が43個の色名を書き出しているから、男性よりも、女性のほうが色名に関心をもっているのであろう。そして、同じ方法で計算すると、大学程度では一人当たりが43個、高校程度では一人当たりが42個、中学校程度では一人当たりが38個、小学校程度では一人当たりが34個の色名を書き出している。つまり教育程度が高いほど、色名に詳しくであろうと考えられる。

それから話し言葉である口語も色名に関係が深く、調査するときには、一人で何種類もの言葉を読ませる場合も多いので、質問票には、二種類以上回答を記入することもできた。つまり、その中には、英語も読せる人が書ける色名数が44個であり、その他の言葉（たとえばフランス語など）も読せる人が書ける色名は43個であり、日本語も読せる人が書ける色名数は42個であり、北京語や福建語や客家語のうち一つを読せる人が書ける色名数は41個であり、高砂族の言葉も読せる人が書ける色名数は36個である。高砂族の言葉は原住民の口語で、福建語は中国福建省南部の言葉であるが、昔から台湾語とも言われた。それでも元のままの福建語とは少し変わっていて、日本語の単語、例えば紺色、国防色のようなものも入っている。

3.2. 収集した色名の色系分布

この被験者が記入した73,229個の膨大な色名を色系によって分類すると、色名の使用傾向を見る事ができ

る。この中では、赤色系の色名が最もよく使われる色系であり、逆に紫色系の色名があまり使われない色系である。これは周王朝（前1027～前256年）以来の漢民族が赤が好きであるためと、孔子が紫という中間色を嫌いであったからであろう。（表3）

3.3. 使用頻度の相対的に高い慣用色名

色名の個数だけでなく、色名の種類をも注目すべきである。この調査で全サンプルから集めた色名の種類（被験者がお互いに重ならない色名）は1,349個であり、性別からみると男性からは1,107個、女性からは1,103個を集めた。教育程度からみると大学程度からは1,093個、高校程度からは831個、中学校程度からは803個、小学校程度からは775個の色名を集めた。やはり教育程度のレベルによって、だんだんに種類が減っている。こんな多くの色名の種類の中で、使用頻度の相対的に高い慣用色名は表2に示すとおりであり、全部で129個ある。ただ頻度の相対的に高い系統色名（86個）は含まれていない。ここで、頻度の相対的に高い色名と言うのは、筆者の調査した頻度70%～0.06%の全部色名の中からの、ほぼベスト200の色名であり、頻度70%～4%の色名である（因に、頻度0.06%の色名が、全部色名26%を占めているので、4%の頻度が高いほうである）。

3.4. 基本要素の使用頻度に対する影響

この129個の色名中では、使用頻度70%の色名が、最も頻繁に使われるものである。つまり、全標本1,815人の中の1,270人が、粉紅（ピンク）という色名を書いた。あるいはそれを常用色名と思っている。そして、使用頻度4%の色名の石緑にしても、72人がこの色名を常用色名と思っている。ここで言う粉紅は、Berlin-Kayが提言した11個の「基本色彩語」の一つであり、11個の「基本色彩語」が全部そろった民族が、その文化のレベルが高いとしている。日本も「基本色彩語」がそろった民族の一つであるが⁶⁾、北京語を使う漢民族はそうではないのである⁷⁾。その原因の一つは、日本人はmomoiroと言う色名を使っているが、漢民族にはそんな色名はないと思われた。実際にはこの粉紅が即ちピンクであり、momoiroより「基本色彩語」の標準に近いのである。と言うのは、Berlin-Kayの標準の一つは、自然物に因んだ色名が「基本色彩語」ではないからである⁸⁾。が、momoiroは桃色であり、「桃の花の色に似ているの

表2 記入式質問票から集めた使用頻度の高い慣用色名(129個)一覧表

色名	頻度	色名	頻度	色名	頻度	色名	頻度
粉紅	70%	象牙白	18%	枇杷黃	10%	菊黃	6%
草綠	67	水綠	16	檸檬黃	10	湖綠	6
天藍	66	牽牛紫	16	天空藍	9	紅豆色	6
金黃	52	米色	16	景泰藍	9	晴藍	6
玫瑰紅	51	夕陽紅	15	星藍	9	杏黃	6
土黃	51	卡其色	15	葡萄紫	9	珊瑚紅	6
血紅	44	茶色	15	寶石綠	9	梨黃	6
乳白	43	玫瑰紫	15	茶褐	9	海軍藍	6
翠綠	42	竹綠	15	翠藍	9	穗黃	6
橘紅	41	草莓紅	15	銅綠	9	象灰	6
蛋黃	40	魚肚白	15	靛青	9	墨黑	6
水藍	39	水色	14	膚黃	8	牛仔色	6
咖啡色	37	楓紅	14	土紅	8	沙黃	6
雪白	36	寶石藍	14	舌紅	8	髮黑	6
桃紅	36	銘黃	14	洋紅	8	橘子橙	5
墨綠	34	橘色	14	湖藍	8	群青	5
銀白	32	豆綠	13	甘蔗紫	8	荷葉綠	5
寶藍	32	蔥綠	13	椰子綠	8	土灰	5
豬肝紅	28	雞冠紅	13	祖母綠	8	柚黃	5
茄色	27	藏青	13	頰紅	8	冰山藍	5
磚紅	27	乳黃	13	甲基紫	7	聖誕紅	5
蘋果綠	27	海藍	12	火紅	7	虎皮黃	5
橄欖綠	25	蘋果紅	12	蝦紅	7	秧綠	5
香蕉黃	23	銀灰	12	孔雀藍	7	海帶綠	5
米黃	22	橘黃	12	兔眼紅	7	大理石灰	5
唇紅	21	粉白	12	豆沙色	7	瓦灰	5
鵝黃	21	水紅	12	芋紫	7	蕃茄紅	5
棗紅	20	水晶藍	11	鐵灰	7	玉藍	5
鼠灰	19	胭脂紅	11	奶油色	7	烏梅紫	4
肉色	18	櫻桃紅	11	柿紅	7	石綠	4
柳丁橙	18	葉綠	11	清水藍	7		
羅蘭紫	18	芒果黃	10	月白	7		
木瓜黃	18	古銅色	10	茄皮紫	6		

表3 調査からみた慣用色名の分布

色系	色名数	パーセント	平均記入色数
赤色系	16,843	23%	9
橙色系	8,861	12	5
黄色系	9,227	13	5
緑色系	11,863	16	7
藍色系	11,057	15	6
紫色系	6,151	8	3
白黒系	9,227	13	5

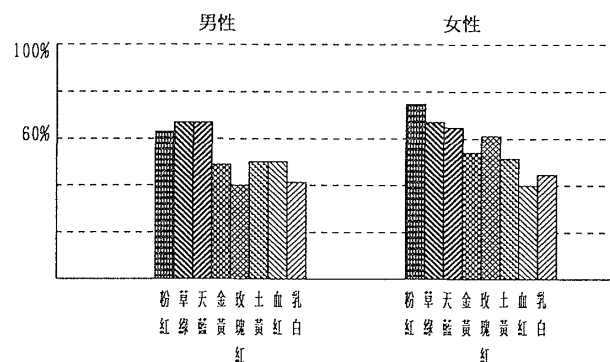


図1 性別要素から見た色名の使用頻度 (%) の差別

でこの名がある⁹⁾」のである。そして粉紅は、単に薄い紅色にすぎないが、この調査によって、その重要性が明らかになった。

標本にある性別要素からみると、図1に示すように、半分以上の男性に常用と思われる（使用頻度50%以上の）色名が、粉紅、草緑、天藍、土黄、血紅であり、半分以上の女性に常用と思われる色名が、粉紅、草緑、天藍、金黃、玫瑰紅（バラの赤色）、土黄であるが、中でも、男性より女性の使用頻度が20%高い色名は玫瑰紅であり、12%高い色名は粉紅のほか、橘紅、桃紅（図1に載っていない）である。そして女性より男性の使用頻度が10%高い色名は血紅であるから、女性の使用頻度の高い色名は比較的エレガントであるようで、血紅のようなけばけばしい色の色名をあまり使わないようである。

教育程度の要素からみると、使用頻度50%以上の色名はやはり教育程度のレベルによって数は違っている。表4に示したように、同じ色名でも、その使用頻度の順位が違っている。

3.5. 異なる形式の調査に見たほぼ同じ結果

以上の調査は、被験者が質問票に記入したものであるが、出来るだけ多くの色名を集めるために、もう一枚の質問票に記入を被験者に依頼した。後者の質問票の形式は前のものより簡単である。つまり、中国の「色譜¹⁰⁾」や台湾のペンキの色カードから選んだ228語の色名を被験者に選択させ「常用」と思われる色名に、丸をつけてもらった（表5）。そして、各色名につけられた丸を集計して、使用頻度の高い色名を選び出した。

この調査の全サンプルは前と同じ1,815人である。つまり、一回のインタビューで二種類の調査をおこな

表4 各教育程度の使用頻度50%以上の色名

大学程度		高校程度		中学校程度		小学校程度	
粉紅	74%	粉紅	72%	粉紅	66%	草緑	63%
草緑	69	天藍	64	草緑	65	天藍	64
天藍	69	草緑	66	天藍	63	粉紅	63
金黃	56	玫瑰紅	52	玫瑰紅	51		
玫瑰紅	55	金黃	51	金黃	51		
土黄	54	土黄	51				
翠緑	51						

った。丸をつけることは容易なので、平均して、一人が70個の色名に丸をつけたことになる。

性別的にいうと、男性が67個に、女性が73個に丸をつけた。

教育程度からみると、大学程度が75個に、高校程度が71個に、中学校程度が68個に、小学校程度が62個に丸をつけた。

話せる言葉からの影響はほぼ記入式の質問票に近い。つまり、英語の話せる人が79個の色名に、日本語の話せる人が77個に、高砂族語の話せる人が60個に丸をつけた。

各色名の頻度も前より高くなるから、前は頻度4%以上をとったのに対し、こんどは頻度14%以上の色名を選び出した。この10%の差異が出たのは、選択式の質問票から集めた色名の最高の頻度（80%）が、記入式の質問票の結果（表2）より10%高いからである。これで集計された慣用色名は95個であり、そのベスト10は、乳白、天藍、蛋黃、草緑、米色、粉紅、雪白、玫瑰紅、咖啡色（コーヒー色）、肉色（肌色）であった。その半分が前のと同じであった。

面白いのは、ここの頻度80%の乳白（クリーム色、Cream）が、Maerz-Paulの調査では、イギリスで使用頻度が100%であり、アメリカで84%であったことである¹¹⁾。今回は全体から見ると、前のと重なる

表5 選択式の質問票

下の色名の中に、「常用色名」と思われるものを丸をつけて下さい。

動物と関係のある色名	R018 舌紅	R019 血紅	R028 兔頭紅	R029 珊瑚紅	R030 唇紅	R037 魚鰓紅
	R038 雞肝紅	R039 喜顰紅	R044 蝦紅	R045 鰓紅	R048 雞冠紅	R049 鶴頂紅
	N014 肉色	N023 蛋黃	N025 鹿皮褐	N027 蜜黃	N029 鮭魚紅	Y012 奶油色
	Y014 乳白	Y016 虎皮黃	G015 孔雀綠	G029 蛙綠	G038 鸚鵡綠	B014 孔雀藍
	W015 水牛灰	W016 牛角灰	W019 田鼠灰	W020 沙魚灰	W023 犀角灰	W026 烏黑
	W027 魚肚白	W029 鼠灰	W030 象牙白	W031 象牙灰	W039 鴿灰	W040 珍珠灰

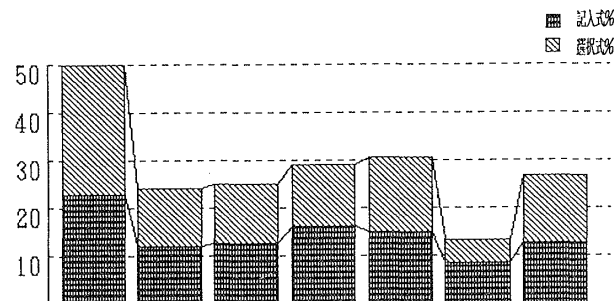
慣用色名が82%であるが、それらが全て使用頻度が0%～32%のものである。前のと違った色名も幾つかあった。それらは、表6に示すとおりで、全て使用頻度31%以下のものであり、全部で17個である。これらの色名と記入式の質問票から集めた128個の色名と合わせて、全部で145個の慣用色名セットになる。

4. 結論：調査から見た中国色名の特徴と調査の効用

もともと、選択式の質問票に載った色名数は赤色系が44個、橙色系が16個、黄色系が21個、緑色系が25個、

表6 選択式の質問票から集めた17個の新しい色名

色名	頻度	色名	頻度	色名	頻度
巧克力棕	31%	海棠紅	22%	芽綠	15%
夾竹桃紅	30	孔雀綠	22	鐵棕	15
芭蕉綠	26	鶴頂紅	18	蔗黃	15
魚鰓紅	24	鴿灰	17	鉛灰	14
海青	23	落霞紅	17	水仙黃	14
朝陽紅	23	潭水綠	15		



紅色系 橙色系 黄色系 緑色系 藍色系 紫色系 黑白系

図2 二種類の質問票から集めた色名の色系分布

表7 三つの中国語の色名著作とその互いに重なる色名¹³⁾

著作	色譜	中国の傳統色	色名の初歩調査と研究
研究者	周太玄など	王定理	筆者
発行所	中国科学出版社	大日本インキ化学	国立台湾師範大学
発行年	1959年	1986年	1985年
色名来源	専門家提供	絵画文献など	アンケート
セットの色数	慣用色名	慣用色名	慣用色名
	573	290	146
セットの色数	総色名	総色名	総色名
	52	30	86
色譜と重なる数	50		112
三つの色名セットが互いに重なる慣用色名	金黃 玫瑰紅 土黃 乳白 翠綠 咖啡色 銀白 橄欖綠 棗紅 牽牛紫 寶石藍 蔥綠 檸檬黃 銅綠 孔雀藍 鐵灰 月白 群青 鴿灰 鉛灰		

藍色系が26個、紫色系が10個であった。そこに載った赤色系の色名は全体の18%なのに、丸をつけた赤色系の色名は28%に上った。そこに載った橙色系の色名は9%なのに、丸をつけた橙色系の色名は12%に上った。逆に、紫色系の色名が6%なのに、丸をつけた紫色系の色名は、逆に5%に下った。各色系の占めるパーセンテージと記入式の質問票の結果との比較は、図2に示すとおりであるが、両方とも赤色系や、その隣の橙色系の色名が最も好まれ、紫色系の色名が常に嫌われそうである。まさに孔子が言ったように、「紫が朱にとって代わるのはけしからん」と言っていた通り、これは調査から見た中国語の慣用色名の大きな特徴の一つであろうと考える。

この調査からもう一つの視点が明らかになった。つまり、調査を深くすればするほど、その選ばれた慣用色名の普遍性も高くなる。今回の調査の結果を、他の中国語の慣用色名の著作と比較すれば、次のような結論も得られる。つまり、周太玄らの「色譜」と王定理の「中国の傳統色」と筆者の「色名の初歩調査と研究」を比較して、三つの著作にある色名の重なるものを比較すればよい。結果として三者の重なる色名は20個あった。日本語や英語の各色名セットにある重なる色名¹²⁾とくらべると、ここの20語の色名はなかなか珍しいものである。というのは、中国語の色名の著作には重なるものが少ない。それは著作の間に、あまり互いに参考や伝承をしないためか、あるいは中国語の色名が多すぎるためであろうと考えられる。そこでこの少数の重なる色名が、特に重要な、あるいは特に常用的なものではないと、学者たちが皆そろってこのような色名には注意しないであろう。

この20個の重なる色名は、筆者の調査では、表2に示したように、その中の9個の色名は、使用頻度が20%以上のものであり、即ち、その約半分が表2の中にも最も重要な地位を占めるから、使用頻度が高いほど、ほかの色名セットと重複する場合も多くなる。そして、もし色名数のもっとも多い「色譜」を基準として、「中国の伝統色」がそれと重なる色名は、50個である。つまり16%しかそれと重ならない。同じ北京を中心に研究が展開されたが、その重複する色名が少ないのに対して、筆者の遙かな南で研究した「色名の初歩調査と研究」の結果は、かえって112個の色名が「色譜」と重なり、そればかりでなく、筆者の系統色名が「色譜」より多くなるのに、48%の色名が「色譜」と重なっている。そして、ほかの色名セットと重複した色名

は、いっそう普遍性を持っているものであろう。そこで、筆者の約半分の色名がこう言う普遍性を持つことは、色名の調査の効用ではなかろうかと考える。

5. 謝辞：終わりにこの論文を纏めるに際して、千葉大学工学部矢口博久教授、東京工芸大学久保走一教授、並びに女子美術大学大学院川上元郎教授の御指導を賜った。深く感謝の意を表する。

参考文献

- 1) 盛田真千子, 香川幸子: 「慣用色名の認識について (第三報)」, 日本色彩学会誌17-1 (1993) 1-11。
- 2) A. Maerz, M. R. Paul: A Dictionary of Color, McGraw-Hill Book Co., Inc. (1950) 16-17.
- 3) 福田邦夫: 「赤橙黄緑青藍紫」, 青娥書房 (1987) 35。
- 4) 呂 清夫: 「色名の初步調査與研究」, 国立台湾師範大学工芸教育学系 (1985)。
- 5) B. Berlin, P. Kay: Basic Color Term, University of California Press. (1969) 103.
- 6) Ibid. 95-96.
- 7) Ibid. 84-85.
- 8) Ibid. 6.
- 9) 和田三造監修: 「色名大辞典」, 創元社 (1946) 88。
- 10) 周太玄等: 「色譜」, 中国科学出版社 (1959)。
- 11) A. Maerz, M. R. Paul: ibid. 16-17.
- 12) 呂清夫: 「中国語と英語に関する比較研究」, 日本色彩学会誌15-3 (1992) 156
- 13) 同前, 160, 色名の説明がこの既報を参照。

(受付: 1993年10月21日)

著者紹介



呂 清 夫

1942年9月20日生

筑波大学芸術研究科, 構成専攻

1980年修士課程修了

国立台湾師範大学工芸教育学系及び大学院教授

日本色彩学会会員

芸術学修士

1985年9月から一年間, 筑波大学客員研究員